リリカル世界に転生！？

ミラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカル世界に転生！？

【Ｎコード】
Ｎ３６３１Ｘ

【作者名】
ミラー

【あらすじ】
ほえぇぇぇ、いきなり事故にあって死んじゃった。
そして神様に会って転生！転生の場所はリリカル世界！！
今、第二の人生がはじまる。

プロローグ

はじめまして。主人公の秋山　愛生です。今私は何もない世界にいます。
そして、私の前には「神様」がいます・・なぜ私の前に神様がいるのかというと・・・

愛生「ん～、やっとＣＣＳを全部見終わった・・・やっぱり休みの日は
　　アニメ鑑賞にかぎるわ♪ってそうだ！今日はまど★マギのＤＶＤの
発売日だった。急いでアニ〇メイト行かなきゃ。」

愛生「ふう、あぶないところだったわ。少し遅かったら買えなかったところだったし、
さあ、早く帰ってみましょうかね。」

愛生は家に帰るために交差点の信号で待っていた。
とそこへ居眠り運転してたトラックが突っ込んできて
愛生を轢いた。

愛生「う・・ここは？あれ・・私トラックに轢かれて・・・・ああここは天国なのかしら。」

？？？「そうじゃ。ここは天国じゃ」
愛生「！！誰！？」
声がする方向に振り向くと一人の老人がいた。

愛生「あなたは？」

神「ワシは神様じゃ。」
愛生「ええ！神様！？なんでここに？」
神「それは・・わしのミスでキミを死なせてしまったからじゃ・・すまぬ。」

愛生「イラ♪」

神「だから死なせってしまったお詫びに転生させてあげよう」

愛生「じゃあ、リリカルの世界が良いわ。」

神「了解じゃ。じゃあ1期～3期のどこの世界がいいのじゃ？
あと能力やその世界のなまえなども決められるけど・・」

愛生「そうね・・じゃあ2期で、能力はさくら（さくらカード）、ドラクエ（呪文・特技）、ブリーチ（鬼道・縛道）、リリカルの能力が使えるようにしてほしいわね。あと魔力はSSSで、CCSの魔力はすべてのカードをさくらカードしたときの桜ちゃんくらいで
あとデバイス（インテリジェント）で名前はスター・ホープでお願いね。
容姿は・・CCSの桜似（声も）名前は春風　桜でお願いします♪」

神「了解じゃ・・ほい（チート乙）」

桜「ねえ、鏡ないかしら。ちょっと姿見てみたいから♪」
神「わかった、ほれ鏡じゃ。」
鏡に写る自分を見て
桜「うん。ばっちりね♪ありがと。」

神「うむ。それじゃそろそろリリカル世界に送るけど準備はいいかの。」
桜「うん。いいよ」
神「それじゃ・ほいや。」

こうして私はリリカル世界に転生しました。

なのはちゃんに会おう♪（前書き）

転生を無事終え　リリカル世界に、
そして桜がさっそく取った行動とは・・・

はじめての小説執筆です。よろしくおねがいします。

なのはちゃんに会おう♪

１２月１日ＡＭ６：３０
桜「ん～。着いた、さてここは海鳴市のどこかしら。」
あたりを見渡す桜・・とそこはあるシーンの場所だということがわかった
桜「なるほど・・公園みたいね。・・１期の最終話本当に感動だったわ・
さてじゃあ、さっそくなのはちゃんに会いにこうかしら。確か桜台にいけばなのはちゃんがいるんだよねえ・・ねえスター・ホープ」
Ｓ・Ｈ「はい、確かにいますね。魔力反応も感知できます。」
桜「よし、じゃあさそっく行きましょう。
移動はやっぱり・これで♪」

桜はブリーチの移動方法「瞬歩」で桜台を目指すのであった。

１２月１日ＡＭ６：３５桜台

なのは「それじゃあ今朝の練習しあげ、シュートコントロールやってみるね。」
Ｒ・Ｈ「わかりました。」
なのは「リリカルマジカル
福音たる輝き
この手に来たれ
導きの元鳴り響け
と言ったあとになのはは、空き缶を上に放り投げた。
ディバインシューター、シュート」
とそこに瞬歩で来た桜が
桜「あ、あれって確かディバインシューターで１００回缶に当てる

練習だったはずだよね、じゃあ今は邪魔しちゃ悪いから魔力気配消して
終わるのを待とうっと♪」
なのは「コントロール」
と次々と缶に当てていくなのは。
R・H「１８（エイティ）、１９（ナイティ）、２０（トゥエンティ）、２１（トゥエンティワン）」
とR・Hもカウントしていく。
なのは「アクセル、くぅん」
とディバインシューターの速度を上げた
R・H「５５（フィフィティファイブ）、６０（シックスティ）、６４（シックスティフォー）、６８（シックスティエイト）
７０（セブンティ）、７３（セブンティスリー）、９８（ナインティエイト）、１００（ワンハンドレット）」
とR・Hカウントが１００で終わると
なのは「はあ、ラスト」
缶にディバインシューターを当ててごみ箱に入れようしたが
外れたようだ。
なのは「あ～あ」
ちょっと落胆するなのはだったが
R・H「よい出来ですよ、マスター」
と言った
なのは「あはは、ありがとうR・H」
と言って缶をゴミ箱に入れた。
なのは「今日の練習採点すると何点？」
となのはがR・H聞いた。
R・H「約８０点です」
なのは「そっか」
と言った直後に
R・H「マスター近くに魔力反応があります」

と言い出した
なのはは驚いて辺りを見ると一人の女の子がいた
なのは「あなた誰？名前は」
桜「私は春風桜よ」
なのは「あ、私高町なのは。え、えと桜ｔｙ「マスター」なにＲ・Ｈ」
Ｒ・Ｈ「そろそろ家にに戻らないと・」
なのは「ふぇ！？ほ、本当だ。じゃあ桜ちゃん午後４時翠屋に来てほしいだけといいかな」
桜「うん。いいよ」
なのは「じゃあ、またあとでね」
となのはは走っていった（途中で一回こけた）
桜「・・やっぱり本当に運動神経は駄目なんだなあ。」
Ｓ・Ｈ「そのようですね」

１２月１日ＰＭ４：０５
桜は翠屋の前にいた
桜「ここね。やっぱアニメで見てけど本当に人気があるんだ。」
店内は学生や主婦たちで大賑わいだった。
桜「困ったわね、座る場所がないなあ」
と店内見渡すと
なのは「桜ちゃんこっち」
となのはの声が聞こえたので向かうとなのはが座ってた。
なのは「にゃはは、この時間は混むから先に席とっておいたよ」
桜「ありがとう」

なのは「じゃあさっそくＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩしっよか」
桜「（ほえ～～、もうＡ，Ｓでその話し方を習得してんだ）」
なのは「じゃあはじめに、どうして私の近くにいたの？」

桜「そ・それはえ～と・・親戚の家に遊びに来てて（転生してここに来た
なんていえないからなあ・）
それで一人で散歩してら魔力の気配がしたから・・」
なのは「そっか、じゃあお父さんかお母さんが管理局の人なんだ」
桜「え、ええそうよ。お父さんが管理局で仕事しているわ。
確かランクはＡＡで航空武装隊だったはず。」
なのは「へえ～すごいね桜のお父さん。じゃあ桜ちゃんは今ランクどれくらいなの？」
桜「確か前に計ったときはＡだったかな。（本当はＳＳＳなんだけどね♪）」
なのは「え、もうＡもあるんだ。じゃあもしかしてデバイスもあるの？」
桜「うん。あるよ、ほら」
と桜の首には星の鍵のような形したものがぶらさがっていた。
桜「インテリジェントデバイスで名前は「スター・ホープ」よ」
Ｓ・Ｈ「はじめまして」
なのは「インテリジェントデバイスなんだ、私と同じだね。」
なのは「なるほどわかったの。じゃあ桜ちゃん友達にならない？」
桜「もちろん良いよ」
なのは「やった～じゃあこれからよろしくね桜ちゃん」
桜「こちらこそよろしくね、なのはちゃん」
なのは「うん♪」
桃子「あら、なのはまたお友達が出来たの。」
士朗「よかったな、なのは」
なのは「ちょ、お母さん、お父さんいつからそこに！？」
桃子「さあ、ついからでしょう♪
はじめまして、なのはの母の高町　桃子です。
でこっちが私の夫の
士朗「なのはの父の高町　士郎だ。

う～と　君の名前は？」
桜「あ、私春風桜です。」
桃子「ん。じゃあ桜ちゃんよろしくね。」
桜「はい。（アニメでも思ったけどやっぱり
この夫婦若すぎるよ～）」
そして友達記念として桃子さんがケーキ
をもってきてくれて
なのはと楽しく話したら、
二人の人がこっちにきた。
恭也「ん、はじめて見る顔だな」
美由紀「もしかして、なのはの新しい友達？」
なのは「あ、お兄ちゃん。お姉ちゃん」
桜「え、なのはちゃん、兄弟いたんだ。（原作知ってたけど・・）
えっと・・はじめまして。さっきなのはちゃんと友達になった
春風　桜です。」
恭也「ああ。なのはの兄の高町　恭也だ。」
美由紀「はじめまして。桜ちゃん。
姉の高町　美由紀です。にしても良かったねなのは、また友達でき
て。」
なのは「うん。」
そうしてなのはちゃんの兄姉も話しにくわわった。
で気がついたらもう夜の６時３０分くらいになっていた。
桜「じゃあ、そろそろ家に帰ります。」
といって帰る準備をしてると、
桃子「あの、桜ちゃんもしよかったら
今日は家に泊まっていかない？
もうこんな時間だし。」
桜「え、いいですか！（良かった～今日どこで
寝ようか考えてたんだよね）」

桃子「もちろんよ。いいわよねなのは」
なのは「うん。もっと桜ちゃんとお話したいの。」
恭也「そうだな、部屋もあるしな。」
S・H「見つかってよかったですねマスター」
桜「うん、じゃあお言葉に甘えて今日は泊まっていきます。」
こうして私はなのはちゃんの家に泊まった。

12月2日AM2：23
局委員「うあああああ」
???「雑魚いな、こんなんじゃあ、たいしたたしにもならないけどお前らの魔力闇の書のえさだ」
局委員「うががががぁぁぁ」

なのはちゃんに会おう♪（後書き）

桜「・・なんか中途半端なところで終わってるけど大丈夫？」
作者「ダブンダイジョウダトオモウヨ・・」
桜「・・でもどうして片言なのかな♪」（S・H起動中）
作者「そ・・それは・・やっp「雷（サンダー）」ぎゃぁぁぁ」
桜「もう、次はちゃんと書いてよね。」
作者「了解・・」
桜「それじゃあ次回にレリーズ！」

はやて&ヴォルケンリッター（前書き）

3話目投稿しました。

はやて&ヴォルケンリッター

１２月２日　ＡＭ　７：００
なのは「桜ちゃん起きて。」
桜「うみゅう～」
なのは「桜ちゃん、おはよう♪」
どうやらお越しに来てくれたらしい
桜「うん。おはようなのはちゃん。」
なのは「じゃあ、着替えたら下におりてくれるかな。お母さんが朝食つくってくれてるから。」
桜「わかった」

下に行くと桃子さんが料理を机に並べているところだった。
さすがにただ見ているだけではあれなので私も並べるのを手伝った。
そこへ、道場に兄姉を呼びに行ってたなのはが帰ってきたので
朝食を食べ始めた。
なのはは食べ終わると学校に行った。恭也、美由紀も同じタイミングで家を出た。

桜「じゃあ、そろそろ退散だね。」
Ｓ・Ｈ「そうですね。」
桃子「あら、もう帰っちゃうの？。」
桜「はい。本当に泊めてくだっさてありがとうございました。」
桃子「いえいえ。こちらこそなのはと友達になってくれてありがとう。」
桜「はい。それじゃあまた。」
桃子「また何かあったらいらっしゃい。」
桜「わかりました。それじゃあ。」
桃子「はい。気をつけてね」

私はもう一度お礼を言ってなのは家を出た。
桜「えっと、次は図書館ではやてちゃんに会うだけど、まだ時間あるのよね～」
S・H「では、昨日なのはさんが魔法の練習をしていたところで能力の確認や練習をしてはどうでしょう、マスター」
桜「う～ん、そうだね私もいろいろ試してみたいものあるしね、じゃあいこっかS・H」
S・H「はい。マスター」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
１２月２日　ＰＭ　４：２０　桜台
桜「よ～し、次は凍（フリーズ）のカードつかっ「マスター時間が・・」え！」とS・Hに言われて桜はあわてて空をみるとすこし夕日が見えていた。
桜「・・S・H今何時かわかる？」
S・H「４：２０ですね。」
桜「確か、すずかちゃんが図書館の前でなのはちゃんたちと分かれるのは４：２４だったはず・・ほえぇぇあと４分しかないよ～。」
S・H「マスター今から行けば間に合います。」
桜「わかったありがとう。」
桜はいそいで瞬歩で図書館へ向かうのであった。

ＰＭ　４：２２　風芽丘図書館
桜「・・なんとか間に立った。じゃあさそっく中にはいっててて、すずかちゃんとはやてちゃんを待とうかしら。」

ＰＭ　４：２４

すずか「じゃあまたあしたね。」
アリサ「うん。」
なのは「ばいばい～。」
と声を掛け合ったあとすずかは図書館に入った。

桜「あ、すずかちゃんが来た。
じゃあ行動開始だね。」
桜は読んでいた本を閉じすずかたちのところへ向かった。

すずか「う～ん。」
と本を探してると
すずか「あ。」
と本の隙間から車椅子に乗った女の子が
高いところにある本を取ろうしているが見えた。

はやて「う～、あ。」
と、取ろうしてた本が取られたのでそのほうに振り返ると
一人の女の子が立っていた。
すずか「これ、ですか？」
と本差し出した。
はやて「はい。ありがとうございます。あの～
一緒に本探すの手伝ってくれません。」
すずか「うん。もちろん」
はやて「ほんまか。おきにいじゃあ次は・・」

すずか「そっか～同い年なんだ。」
はやて「うん。ときどきここで見かけてたんよう。
あ、同い年くらいの子やって。」
すすか「じつは私も、えっと私月村（つきむら）　すずか」

はやて「すずかちゃん・・八神はやてて言います。」
すずか「はやてちゃん・・」
はやて「ひらがなではやて、変ななまえやろ。」
すずか「そんなことないよ。きれいな名前だと思う」
はやて「ありがとう。」
すずか「ところではやてちゃん、ほしい本あと何冊？」
はやて「う～と2冊や・・・あったですずかちゃん。
あ、あかん一番上の段やどないしよう。」
すすか「確か台があったはずだからとってくるね」
とすずかが台を探しにいこうとしたとき
桜「はい。この本でいいよね？」
と変わりに一人の女の子が取ろうとした本を持って立っていた。
はやて「ありがとう。」
桜「ううん。お礼なんて別にいいよ～。
困ってそうだったから助けただけだし。」
すずか「あなた今日はじめてみる・・」
はやて「せやなあ。すずかちゃんはときどき
見かけてけど確かにはじめてみる子や。」
桜「うん。だって今日はじめてここに来たんだもん。
あ、私春風　桜よろしくね。」
すずか「えっと月村　すずかです。」
はやて「八神　はやてや。よろしゅう。」
桜「うん♪」
すずか「桜ちゃん家ってどこ？」
桜「海鳴市のとなりの町よ」
はやて「なるほどなあ。どおりで会わんわけや」
桜「親戚の家がこっちにあるから
来たついでに寄っただけなんだ。」

すずか「そうだったんだ。」

そうして1時間くらいはやてちゃんと話をしました。

はやて「ほな、うちそろそろ帰るわ。」
はやてがそう言うと図書館の窓から夕日がさしこんでいた。
桜「じゃあ私たちも帰ろうかすずかちゃん。」
すずか「うんそうだね。あ、はやてちゃん車椅子おしてあげる。」
はやて「ほんまか。おおきに、じゃあ入り口まで頼むな。」
すずか「え、家までじゃないの？」
桜「迎えがきてるからd・・（しまった）」
はやて「え！？せや、確かに親戚の人が迎えが来てるからだけど桜ちゃんなんでわかったん？」
桜「そ、それは・・だぶんそうじゃないかなと・・（ほえぇぇ原作で知ってたから言っちゃったよ。）」
はやて「は～桜ちゃんは勘がええなあ。」
桜「うん。（ほ）」
はやて「ほな、入り口まで頼むな。すずかちゃん」
すずか「わかった」
そうしてすずかが図書館の入り口まではやての車椅子を押していると入り口に一人の女の人が立っていた
？？「あ」
その人ははやてたちを見つけると軽くお辞儀をした。
桜、すずかもその人に軽くお辞儀をした。
はやて「ありがとうすずかちゃんここでええよ。」
すずか「うん。それじゃあ。」
はやて「お話してくれておおきに、なすずかちゃん、桜ちゃん」
すずか「うんまたねはやてちゃん。」
桜「またね。」
そうしてはやてはその人と図書館をでた。
すずか「じゃあ私もここで。」

桜「うん。じゃあまたねすずかちゃん」
すずか「うん。私も桜ちゃんと話せてうれしかった。じゃあね」
桜「またね。」

??「はやてちゃん寒くないですか？」
はやて「うん。平気シャマルもさむない？」
シャマル「私はぜんぜん」
と図書館の駐車場に出ると
一人の人がいた。
はやて「シグナム」
シグナム「はい。」
はやて「晩御飯シグナムとシャマルはなにが食べたい。」
シグナム「ああ、悩みます。」
シャマル「スーパーで材料見ながら考えましょうか。」
はやて「そやね。
そういえばヴィータは今日もおでかけ？」
シャマル「ああ・・そうですね。」
シグナム「外で遊びあるいているようですが・・
ザフィーラがついていますのであまり心配はいらないですよ。」
はやて「そうか・・」
シャマル「でも、少し距離が離れていてもずっとあなたのそばにいますよ。」
シグナム「はい。われらはいつもあなたのそばに」
はやて「ありがとう・・」

１２月２日　ＰＭ７：４５　海鳴市　市街地上空
??「どうだ、ヴィータ見つかりそうか？」
ヴィータ「いるような、いないような
こないだからときどき妙にでてくる巨大な魔力反応

あいつがつまればいっき２０ページくらいは行きそうなんだかな。」
??「分かれて探そう。闇の書は預ける。」
ヴィータ「ＯＫ、ザフィーラ、あんたもしっかり探してよ。」
ザフィーラ「心得ている。」
とザフィーラはどこかへ行った。
残ったヴィータは魔法陣を広げた
ヴィータ「封鎖領域展開」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
１２月２日　ＰＭ７：４５　海鳴市　市街地

桜「！！封鎖領域ってことはＳ・Ｈ」
Ｓ・Ｈ「はい。上空に魔力反応があります。」
桜「・・じゃあいよいよなのはちゃんに私の本当を
見せるときがきたみたいね。」
Ｓ・Ｈ「ええ、でもなのはさんならきっと
わかってくれますよ。」
桜「うん。そうだねじゃあいくよ。」
Ｓ・Ｈ「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ」
桜「スター・ホープ」
Ｓ・Ｈ「ＳｔａｎｄｂｙＲｅａｄｙ」
桜「セーット・アップ！」
桜「ふう、じゃあまだむこうには
私の存在知られたくないから
Ｓ・Ｈ魔力調節よろしくね。」
Ｓ・Ｈ「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ。」
桜「あとはフェイトちゃんがくるのを
待つだけっと♪」

そのころなのはは家で勉強をしていた。
そしてR・Hが
R・H「警告、緊急事態です」
なのは「ふぇ！？」
と言った瞬間になのはの家が封鎖領域に覆われた。
なのは「結界！」

ヴィータ「魔力反応！！大物みっけ。」
とデバイス振り魔法陣を消した。
ヴィータ「行くよ、グラーフアイゼン」
G・A「了解」
とヴィータは飛行魔法でなのはのほうへと
飛んだ。

R・H「対象、高速で接近中」
なのは「近づいてきてる？こっちに！」
と不安そうに空を見るのであった。

ヴィータは飛行魔法移動しているとG・Aが
「対象、接近中」と言ったのである。

なのはビルの屋上にいた。
そして周りを見渡しているとR・Hが
「来ます。」と言ったのでなのはは身構えた。
とするとなのはのところへ何かが飛んできた
「誘導弾です。」とR・Hは言った。
それ聞いた瞬間なのははプロテクションを張った。
直後に張ったプロテクションに誘導弾当たり防いでいた。
しかしヴィータがG・Aを振り下ろし追撃してきたのだ
がなのはは持ち前の距離認識の上手さでなんとか防ぐことに成功し

た。
しかし
なのは「きゃあ」と
完全には防ぎいれずに吹っ飛ばされビルの屋上から落ちてしまったのだ。
さらに好機ばかりにヴィータが迎撃し行ったが
なのは「Ｒ・Ｈお願い」
Ｒ・Ｈ「ＳｔａｎｄｂｙＲｅａｄｙ、セットアップ」
と桃色の光がなのはを覆いＢｊ
姿でできたのだった。
それを見たヴィータは一つの鉄球なような玉を出し
真上に投げ、Ｇ・Ａでなのはに向かって打った。
なのはそれを防ぎその結果で発生した煙にまぎれて
距離をとろうとするが
ヴィータ「おらぁぁ」と
突っ込んできた。
なのは「いきなりおそいかかられる覚えはないだけど。
どこの子？」
と振り返り聞いてみた。
なのは「いったいなんでこんなことするの？」
と言ってみた。

がヴィータは何も答えずに次ぎの攻撃をくりだそうしていた。
なのは「教えてくれなきゃわからないてっば！」
と叫び２発誘導弾をヴィータに当てようとした。
ヴィータ「！」
と気がつきそれを一つはかわしもう一つはプロテクションを張り防いだ。
ヴィータ「このやろう！！」とＧ・Ａ振りなのはの元へ
飛んだ。

R・H「フラッシュムーブ」
でなのはは距離をとり
R・H「シューティングモード」
変形した。
そして
なのは「話を・・」
言いながらR・Hに魔力を溜め
R・H「ディバイ」
なのは「聞いてってば。」
R・H「バスター」
とヴィータに向かって撃った。
ヴィータは何とかわせたが帽子が飛ばせれてしまった。

それをみたヴィータは怒りを露にした。
それを感じたのかなのははたじろいだ。
ヴィータは魔法陣展開し
「G・Aカートリッジロード」
とカートリッジを一発G・Aにロードした。
するとG・Aの形状が変化したのであった。
それを見てなのはは驚いた。

ヴィータ「ラケーテン・・」
となのはに突っ込んで行った。
なのははプロテクションで防いでいたが
あっさり破られR・Hで防御したがしだいに罅が
入り
「ハンマー！」
「きゃああ」
ビルの中にふっ飛ばさせてしまった。
＊＊＊＊＊＊

海鳴市　市街地
桜「・・じゃあそろそろ行こうかＳ・Ｈ。
もう魔力調節解除していいよ。」
Ｓ・Ｈ「わかりました」
と魔力を開放した。
桜「じゃあ次はこれだね。」
と雷（サンダー）のカードを出し
そして
桜「雷（サンダー）！！」
と自分に雷（サンダー）当てた
桜「ふう、念のためになのはちゃんと
距離離れて待ってたからこれじゃないと間に合わないのよねえ。」
これとは雷（サンダー）のカードを自分に当てることで秒速１２０キロで移動で
きるようになる
魔法（ただし今の桜の体への負担が大きいため最大３０分が限度）の
桜「雷歩！」
そうしてなのはのところへ向かうのであった。

＊＊＊＊＊＊＊
さらにヴィータはビルの中にいるなのはに追い討ち掛けに行った
Ｒ・Ｈ「プロテクション」
を張るが
ヴィータ「ぶち抜けー」
とさらにヴィータが力をこめた結果
バキィィィィと
なのはのプロテクションを破った。
プロテクションを破られたなのはは
壁にたたきつけられてしまった。
さらに止めとばかりにＧ・Ａをヴィータは振りかぶった。
なのはもなんとか抵抗しようするも意識が朦朧していた。

なのは「こんなので終わり・・嫌だ
ユーノ君、クロノ君、フェイトちゃん！！」
と思い、ヴィータはG・Aを振り下ろした瞬間
突然魔法陣が現れ、さらに二人に人がものすごい
スピードでビルの中にに入ってきてヴィータの攻撃をデバイスで止めた。

ユーノ「ごめん、なのは遅くなった。」
となのはの肩に手を乗せながら言った。
なのは「ユーノ君・・」と言いさらに
正面を見ると二人に女の子がいて
なのはは驚いた。なぜなら二人とも知っている顔だったからである。

ヴィータ「仲間か？」
と攻撃止めている奴に問いかけた。
フェイト「友達だ」
桜「友達よ」
と二人は答えた。

はやて&ヴォルケンリッター（後書き）

桜「今回は少し長いわね・・」
ミラー「まあね、はやてとの出会いとヴォルケンリッターを一気に書いたからね。」
桜「で、また相変わらずグダグダなんだけと・・」
ミラー「・・・・・」
桜「・・・・・ニコ♪」
ミラー「・・すみませんでした。だからデバイスとカードしまってくれませんか・・」
桜「もうしょうがないわねえ。で次回の話は？」
ミラー「おう、次はヴォルケンリッターとの戦闘だ！だけとその前にちょっと主人公紹介をしようと思う。」
桜「うん、確かにそのほうが良いと思うわ。あと、紹介終えたあとの続き頑張って書いてね。」
ミラー「ああ」

じゃあ次回にレリーズ！！」

主人公紹介（前書き）

今回はこの作品の主人公桜の紹介です。

主人公紹介

作者「今回は主人公の紹介をします。」

転生前
名前　秋山　愛生
身長　１７５センチ
体重５０キロ
性格　基本明るい　あとヲタク（主にＣＣＳ、なのは、ＢＬＥＡＣＨまど☆マギｅｔｃｅｔｃ）
桜「まあ性格はよくある設定だとして、名前のモデルってもしかして・・・」
作者「うん。けい○んからとってみましたｗ」
桜「やっぱり。・・まあ私も好きだったからいいけどね。」
作者「まあ転生後はすごいことになってるけどね」
桜「そうだね。」

転生後
名前　春風　桜
身長１２８センチ
体重２６キロ
性格　転生前と変わらず明るい

術式　ミッド式
魔力光　白色よりのピンク
魔力量ＳＳＳランクでＣＣＳの魔力もある（ＣＣＳの魔力量はすべてのカードをさくらカードしたときの桜と同じ）
デバイス（インテリジェント）・・スターホープ（Ｓ・Ｈ）

形状・・ぶっちゃＣＣＳの星の杖
デバイスの性格はレイジングハートに近い
ＢＪ・・３期のＣＣＳＯＰの桜のバトルコスチューム

稀少技能（レアスキル）
星の力
（自分で設定したアニメ、ゲームの能力が使える）

オリジナル魔法
ダーク・ライト・ブレイカー（ＤＬＢ）
なのはのスター・ライト・ブレイカーとほぼ同じ
違うのは威力（ＳＬＢの４倍）と集束の早さ（約１秒）

雷歩（らいほ）
サンダーのカードを自分に使うと秒速１２０キロで移動できるようになる。
ただし今の体だと負担が大きいため３０分が限度

桜「・・でまた名前のほうだけと」
作者「いや～どうしても桜って付けたかったさ
それでいい苗字がないか脳内のアニメ知識けんさくかけたら・・」
桜「おジャ魔女が出でいたのね。」
作者「はい。まあ同時期にやってたし
組み合わせ的にも良いかなって思ってさ」
桜「まあ可愛い名前だし気に入ってるからいいけどね。
それで今後の予定はどうなっているの？」
作者「え～と、とりあえず嘱託魔導師なって、あとは
原作を基本にそこに少し手を加えるてっかんじかな」
桜「なるほどねえ。じゃあそろそろ

時間かしら。」
作者「そうだね。それじゃあみなさんまた」
桜「次回にレリーズ」

ヴォルケンリッターとの戦い（前書き）

遅くなりました。
５話目投稿です。
あと少し長文です

ヴォルケンリッターとの戦い

なのは「桜ちゃん、フェイトちゃん・・ユーノ君」
ユーノ「ごめん。少し遅れたみたいだ。」
なのは「ううん、助けに来てくれてありがとう。」
ユーノ「ならよかったところでなのは、フェイトの隣にいる子誰だい。」
なのは「春風　桜ちゃんだよ。確かお父さんか航空武装隊で桜ちゃんにもAランクの魔力素質があるの。」

ユーノ「・・君はなのはを助けに来てくれたのかい？〜君本当にAランクかい？
僕の見た感じだとSSSくらいある魔力に感じるだけど・・〜」
桜「・・うん、そうだよ。（いまはAAAランクくらいに調節してるからなあ・・）〜・・なのはちゃん、あとで大切な話するからね。〜」
なのは「わかったなの。（たぶん魔力ランクのことかな・・。）」
フェイト「民間人への魔法攻撃、軽犯罪ではすまない罪だ〜なのは、私の隣にいる子は？〜。」
なのは「〜うん、私の友達だから心配しなくて良いよ。フェイトちゃん。〜」
桜「私の友達を傷つけた罪は絶対許さない。」
ヴィータ「何だテメーら。管理局の魔道師か？」
と言いG・Aを握りなおした。
フェイト「時空管理局。嘱託魔道師、フェイト・テスタロッサ〜了解。〜」
桜「私はただの魔道士師。」
とS・Hを構えた。
フェイト「抵抗しなければ、弁護の機会が君にはある。

同意するなら武装を解除して。｛あ、あの｝」
桜「｛私の名前は春風　桜よ。フェイトちゃん｝」
と言いB・Dを構えなおした。
ヴィータ「誰がするかよ！！」
と言いビルの外へ飛んだ。
フェイト「ユーノ、なのはをお願い。｛ん、じゃあ桜
一緒に来てくれる｝」
桜「私からもお願いね。翔（フライ）！｛うん、もちろん。｝」
ユーノ「うん。」
と桜とフェイトもヴィータのあとを追いビルの外に
飛んで行った。
なのは「ユーノ君・・」

ユーノ「うん。」
と言うと目を瞑り回復魔術を発動した。
ユーノ「フェイトのことが終わったから
なのはに連絡しようとしたんだ。
そしたら、通信は繋がらないし
局のほうで調べたら封鎖領域できてるし
だからあわてて僕たちが来たんだよ。」
なのは「そっか・・ごめんね、ありがとう。」
ユーノ「あれは誰？もう一人の子はなのはの友達ってわかったけど
なんでなのはを・・。」
なのは「わかんない、急に襲ってきたの。」
ユーノ「でももう大丈夫フェイトもいるし、
なのはの新しい友達の桜もいるし、それにアルフもいるから。」
なのは「・・アルフさんも！？」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
先にビルの外に出だヴィータはすでに魔法陣を展開していて
桜とフェイトを待ち構えていた。

フェイト「B・D。」
B・D「アークセイバー！」
桜「撃（ショット）！」
をヴィータに放ったがヴィータは
４つの玉を出し
ヴィータ「G・A！」
G・A「シュワルベフリーゲン。」
を放った。
そして互いの技は交差し
ヴィータ「障壁」
で防御し、フェイト、桜は飛んで、で避けていた。
そしてそこに
アルフ「ファイヤー」
とアルフがヴィータに突っ込んできた。
だがヴィータは気がつき障壁張った。
しかし
アルフ「ブレイク！」
でヴィータの障壁を割った。
ヴィータ「この」
アルフに攻撃するがアルフはプロテクションで防いだ。
がアルフ「うあっ」
と押し返された。
しかしフェイトがそのすきにヴィータに攻撃を
仕掛けたが
ヴィータ「！」
気づかれ避けられた。
さらにアルフがバインド、桜が風（ウィンディ）で
捕縛しようしが失敗した。
フェイト「はああ」
とヴィータに斬りかかったが

ガキィィィと防がれた。
ヴィータ「（ぶっ潰すだけなら簡単なんだけど、それじゃ意味ねーぇんだ。
魔力をもってくれないと。カートリッジ残り2発、やれっか・・）」
なのははユーノと一緒にビルの屋上でフェイトたちを見ていた。
なのは「アルフさんも来てくれたんだ・・」
アルフ「{そうだよ。で、なのはフェイトの一緒にいる子は?}」
なのは「{うん・・名前は春風　桜ちゃん私の友達で・・Aランクくらいの魔道師だよ}」
アルフ「{ん、わかった、桜聞こえる?}」
桜「{はい、聞こえますけどあなたは?}」
アルフ「{私はフェイトの使い魔のアルフ、よろしく}」
桜「{あなたがアルフさんか・・よろしくね}」
ユーノ「クロノたちもアースラの整備を一旦保留にして動いてくれてるよ。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
アースラ　内部
エイミィ「アレックス、結界のキーまだできない?」
アレックス「解析完了まであと少し・・」
クロノ「術式が違う、ミッドチルダ式の結界じゃないな・・」
エイミィ「そうなんだよ、どこの魔法だろうこれ・・」

ガキィィ、ガキィイイと
ヴィータ、フェイト、桜
は交戦していた。

ヴィータ「この～」
フェイトへ攻撃しようしたとき

ヴィータ「うわっく・・」
アルフにバインドで捕縛された。
フェイト「終わりだね、名前と出身世界、目的を教えてもらうよ。」
ヴィータ「くぅぅ」
桜、アルフ「！」
と、同時に嫌な気配を感じたのだ。
アルフ「なんかやばいよ、フェイト」
桜「フェイトちゃん、危ない！」
と二人が言った瞬間、フェイトは突然来た魔導師に
攻撃された。
ヴィータ「シグナム！？」
？？「うぉぉぉ」
アルフももう一人来た魔導師に攻撃された。
桜「フェイトちゃん、アルフさん！！
（シグナムさん、ザフィーラ・・）」
シグナム「R・T、カートリッジロード。
紫電一閃！！」
をフェイトに放ったが
桜「盾（シールド）！！」
を使い桜はフェイト守った。

アルフ「フェイト、桜d・」
様子を見に行こうとしたが、
ザフィーラに行く手を阻まれてしまった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
なのは「フェイトちゃん、桜ちゃん、アルフさん・・」
と不安そうに言った。
ユーノ「これは僕も行かないとまずいかな？」
と言うと

ユーノ「たえなるひびき、ひかりとなれ。」
するとなのはのところに魔法陣が浮かび上がった。
ユーノ「いやしのえんのそのうちに、はがねのまもりを
あたえたまえ。」
と詠唱し終わるとなのはの周りに
ドーム状の壁ができた。
ユーノ「回復と防御の結界魔法、なのはは絶対にここから出ないでね。」
なのは「うん。」
うなずいた。
そしてフェイトたちのところに飛んだ。

シグナム「どうした、ヴィータ？油断でもしたか。」
ヴィータ「うるせーよ。こっから逆転するところだったんだ。」
シグナム「そうか。それはじゃましたな、すまなかった。」
と言うとヴィータに掛かってたバインドをブレイクした。
シグナム「だが、あんまり無茶はするな。
お前が怪我でもしたら、我らが主が心配する。」
ヴィータ「わかってるよ。もう」
シグナム「それから、落し物だ」
とヴィータの帽子をかぶせた。
シグナム「破損は直しておいたぞ。」
ヴィータ「ありがとう。シグナム。」
シグナム「状況は3対4。
だが実質3対3・・一対一なら我らベルカの騎士に・・」
ヴィータ「負けはねぇ。」
と飛行魔法で桜たちのところに
向かったが
ヴィータ「あれ？闇の書がない」
と言った。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ユーノ「フェイト大丈夫」

フェイト「うん、桜が守ってくれた。」

ユーノ「そうか、ありがとう桜」

桜「ううん、お礼いいよ~当たり前のことしただけだし。」

フェイト「ユーノ、この結界内から全員同時に外に転送いける？」

ユーノ「うん、アルフと協力できれば・・なんとか」

フェイト「私が前に出るから、その間にやってみてくれる？」

桜「じゃあ、私はフェイトちゃんのサポートするね。」

フェイト「ありがとう、助かるよ。」

ユーノ「わかった」

フェイト「｛アルフもいい？｝」

アルフ「｛ちょいときついけど、なんとかするよ。｝」

と答えた。

フェイト「それじゃあ、がんばろう。」

桜「うん♪。」

ユーノ「うん。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

はやては自分の家で料理をしていた。

どうやらホワイトシチューを作っているようだ。

はやて「♪~~♪~~、よしっと。」

すると携帯が鳴ったので出た。

はやて「もしもし」

シャマル「もしもし、はやてちゃん？シャマルです。」

はやて「どしたん。」

シャマル「すみません。いつものオリーブオイルが見つからなくてちょっと遠くのスーパーまで行って探してきますから。」

はやて「うん、別にええよ。無理せんでも。」

シャマル「出たついでにみんなを拾って帰りますから。」

はやて「そうか」

シャマル「お料理、お手伝いできませんので、すみません。」
はやて「ふふ、平気やって。」
シャマル「なるべく急いでかえりますから。」
・・ビルの屋上でシャマルは電話をかけていた。
はやて「あ、いそがんでええから、きいつけてな。」
シャマル「はい。それじゃあ。」
とはやてとの電話を終えると
シャマル「そう・・なるべく急いで確実にすませます。
K・W導いてね。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ガキィィ
とフェイト、シグナムのデバイスがぶつかり合った。
さらに
桜「剣（ソード）！！」
でシグナムに斬りかかったが
ガキィィと防がれてしまった。
B・D「フォトンランサー」
桜「散在する獣の骨　尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪　動けば風　止まれば空　槍打つ音色が虚城に満ちる・・・」
シグナム「R・T、私の甲冑を・・」
と言うと紫色の光がシグナムの体に纏われた。
フェイト「打ち抜け、ファイアー」
桜「破道の六十三　雷吼炮（らいこうほう）」
とシグナムに撃ったが
シグナムは避けずに目瞑り余裕で二人の技を防いだのである。
それ見たフェイトは驚き、桜は
「（う～んやっぱＡＡＡくらいじゃあ駄目ねえ。
さすが烈火の将だわ。）」
シグナム「魔導師にしては悪くないセンスだ。
だがベルカの騎士に一対二を挑むにはまだたりん。」

とフェイトに斬りかかった。
がギィィイととフェイトは何とか防いだ。
シグナム「R・T、たたき切れ。」
ギィィィとこれもフェイトは何とか防ぐが
力負けしてビルのほうに飛ばされビルにたたきつけられる寸前で
桜「風(ウィンディ)！」
を桜が使いフェイトはたたきつけられずにすんだ。
桜「フェイトちゃん、大丈夫？」
フェイト「うん。桜おかげで大丈夫だよ、ありがとう。」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
ユーノは転送の準備をしていた。
がそこにヴィータが来てユーノに
ヴィータ「はあぁぁぁ」
と攻撃をしかけたがユーノはプロテクションを張り防いだ。
ヴィータは４つの玉を出た。
ユーノ「く～転送の準備はできてるけど空間結界を破れない。～」
アルフ「～こっちもやってだけど、この結果めちゃくちゃ堅いんだよ。～」
と二人の念話を傍受してた桜はあること思ってた。
桜「（確か・・原作だともう少しでシャマルさんに
なのはちゃんのリンカーコア取られちゃうシーンだわ。
Ｓ・Ｈ隙を見つけ行くわよ。）」
Ｓ・Ｈ「ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ　ｍｙ　ｍａｓｔｅｒ」
フェイト「（あれだ、あの弾丸あれで一時的に魔力を高めてるんだ）」
桜「（う～んやっぱりベルカ式カートリッジシステムは厄介ね・・）」
シグナム「攻撃してこないのか。
ならばじっとしていろ。
抵抗しなければ命まではとらん。」

フェイト「だれが・」
桜「するもんか。」
シグナム「いい気迫だ。
私はベルカの騎士　ヴォルケンリッターの将　シグナム
そしてわが剣　R・T　お前らの名は」
フェイト「ミッドチルダの魔導師　時空管理局　嘱託
フェイト・テスタロッサ　この子はB・D。」
桜「春風　桜　そして　S・H。」
シグナム「テスタロッサ、桜それにB・DにS・Hか。」
と言いフェイトたちに斬りかかった。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
なのははユーノの張った結界内からフェイトたちが戦っているのを
見てた。
なのは「（助けなきゃ・・）」
と一歩進んだとたん
「っ」と傷の痛みが来た
がこらえて少しずつ結界の外に出ようと歩き出した。
なのは「私がみんなを、助けなきゃ。」
R・H「master、シューティングモード」
なのは「R・H・・」
R・H「撃ってください、スター・ライト・ブレイカーを」
とR・Hは言った。それに対しなのはは
「そんな、無理だよそんな状態じゃあ・・」
と言ったがR・Hは
「撃てます」
と答えた
なのは「あんな負担のかかる魔法R・Hが壊れちゃよ・・」
と不安そうな声でR・Hに言った。
R・H「私はあなたを信じてます」
と言ってくれたのでなのはは驚いた。

R・H「だから、私を信じてください」
となのはに言った。でそれを聞いたなのはは
なのは「R・Hが私を信じてくれるなら、私も信じるよ」
とR・Hを上に向け魔法陣を展開した。
なのは「〜フェイトちゃん、桜ちゃん、ユーノくん、
アルフさん、私が結界壊すからタイミングを合わせて転送を！！〜」
ユーノ「なのは！？」
アルフ「なのは大丈夫なのかい？」
フェイトは不安そうになのはのほうを見た。
桜「なのはちゃん！！（このシーンは！
S・H。）」
S・H「all right my master」
桜「雷（サンダー）！」
を自らに当て
桜「雷歩（らいほ）！！・・フェイトちゃんもうすぐでなのはちゃん
が危なくなるから助けに行くからシグナムさんお願いね。」
フェイト「えっ」
と急いでなのはのとこへ行った。
・・シャマルの手からなのはを守るために。
なのは「大丈夫、スター・ライト・ブレイカーで打ち抜くから、
カウント。」
R・H「all right」
と魔力が収集し始めた。
R・H「カウント　9（ナイン）、8（エイト）」
とシグナムはなのはが何かしようしていることに気がつき
行こうしたがフェイトに止められた。
「7（セブン）、6（シックス）」
ヴィータも気がつき行こうするがユーノに止められた。
「5（ファイブ）、4（フォー）」
ザフィーラも行こうするがこちらはアルフが止めた。

「3（スリー）・・3（スリー）・・3（スリー）」
とカウントが止まったので
なのは「R・H大丈夫？」
とR・Hに聞いた。
R・H「大丈夫です」
と答えた。
R・H「カウント3（スリー）、2（トゥー）、1（ワン）」
となった瞬間
なのは「！、あぁぁ」
とお腹の辺りから手が出ていた。
シャマル「しまった、外しちゃった。」
と旅の鏡から手を一旦出しまたなのはの
胸の当たりめがけて旅の鏡に通した瞬間
桜「なのはちゃんのリンカーコアは渡さない、
うっ・・」
と桜がなのはの代わりにシャマルに胸を貫かれた。
なのは「桜・・ちゃん・・」
桜「なんとか・・間に合った・・みたい・・だね」
フェイト「桜ー」
とフェイトは桜の元へ行こうとするがシグナムに
行く手を阻まれてしまった。
シャマル「リンカーコア捕獲。
蒐集開始」
闇の書「蒐集」
桜「ああぅう・・
なのはちゃん・・今だよ・・」
と言った。
なのは「桜ちゃん・・うん。　R・H「カウント　0（ゼロ）」
スター・ライト・ブレイカー！！」
と上に撃った。そしてバキイィィ

と結界が壊れた。
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
局員「結界破れました。
映像来ます。」
と映像がアースラに写った
エイミィ「なにこれ、どうゆう状況！？」
クロノ「これは・・こいつら」
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
カランカラン
と桜の手からＳ・Ｈが落ち、
倒れた。
桜「（ふう、リンカーコア
抜かれるときってあんなに痛いだね。
さてＣＣＳの魔力に切り替えなきゃね）。」
とＣＣＳの魔力を開放した。
シグナム「〜〜結界が抜かれた〜〜。」
ヴィータ「〜〜シャマル、ごめん。〜〜」
シャマル「〜〜一旦散っていつもの場所でまた集合〜〜」
エイミィ「ああ逃げるロック急いで。
転送の足跡を」
局員「やってます。」
とある映像に本が写った。
クロノ「！あ、あれは・・」

なのは「桜ちゃん、桜ちゃん・・」
桜「う、う〜ん」
なのは「桜ちゃんよかった〜」
となのはが安堵のしてら
リンディ「ちょっとその子アースラに

来てもらえるかしら・・
なのはちゃんたちも来てもらえる」
桜「・・はい。」
なのは「わかりました。」
桜たちはアースラに行くことになった。
局員「駄目です、ロック外れました。」
エイミィ「ああもう。」
とキーボードを叩いた。
エイミィ「ごめん、クロノ君
しくじった。クロノ君？」
クロノ「第一級捜索指定遺失物ロストロギア　闇の書」
エイミィ「クロノ君・・知ってるの？」
クロノ「ああ・・知ってる少しばかり
嫌な因縁があるんだ。」

ヴォルケンリッターとの戦い（後書き）

ミラー「やっと書けた～」
桜「うん♪そうだね（ニコ）。」
ミラー「あ、あの・・その目が笑って
ないんだけど・・」
桜「ほえ？そうかなあ（ジャキ）」
ミラー「・・遅くなってすみませんでしたーー」
桜「そうよまったく。この小説
ほんの少しずつ読まれはじめてるだからしっかり
してよね。」
ミラー「そのことは感謝でいっぱいですはい。」
桜「うん、それは私からも
ありがとうございます。
さてミラー次回は」
ミラー「はい、次回はアースラでなのはたちに
本当のこと言います。」
桜「まあ、なのはちゃんは少しは気がつきてるみたいだけど・・」
ミラー「おおさすが未来の魔王だけはあるなあ・・」
なのは「ふーん・・ねえミラー私とＯ★ＨＡ★ＮＡ★ＳＨＩなの♪」
ミラー「え・・ちょなのはさんいつからそこに・・嫌だ～～」
桜「ほえ～連れてかれちゃった。
じゃあ次回にレリーズ」
ちなみにＳＬＢを５発撃たれました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3631x/

リリカル世界に転生！？

2011年10月19日03時10分発行